

一話一言

廿八

拘

漫筆雜考

共七十一

内閣文庫		
番號	和	36093
冊數	70 ( 28 )	
函號	212	276

内閣文庫		
三六〇九三號	七〇冊	二二函
類		架



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





一話一言卷之二十八

方快卷軸

百因緣

白書壁

坂上池泥昆

續惺宮ふ集抄

鉄力木

撫摸同急 諸佛生口

貞光海画

釋生叢求

花甲全運

花時遍歌

小金井捷路

古碑

西庭為名信家

玄米汁之画

教里麻男

山寺号

書出之画

天皇系

定家集之百首抄

絹江紙雙付

印 菅麦の價

谷郷書集

對山集

古人愛物

追因

梅花百詠

養川院

光琳

中鑑揚杉紀

鏡臺六座

列女傳

轉世身經

中世御引

御例抄

山和当錦



米價ノ

多

後為君記

惺宮文集あり

日向家集あり

多曲集あり

一語一言を二十

一方帙ハ折あり、佩文韻書画譜卷ハ十五元趙孟頫画

幽風図臣瀾侍下青宮者十有餘年、凡所為

圖書頗獲見之、中有趙魏公孟頫所画幽風、前

曆七月之詩、而以圖繼其後、皇太子覽而善之、

謂圖乃方勝、恐其開闔之繁、當其折扇、丹青易

致損壞、命工裝褙作卷軸、以侍悠久、屢下教令、俾

臣題其末、云、宋學士集、  
ふふふてふに折あり

授、やき、まじい、く、まじ、侍方々のより、まじ、まじ

晋書







人の心は花のさかきなり  
心とてさかきなり  
より火











嘆天以此告天下白豕而折之与暗也又可  
嘆美是下是形按此居則今日之著明未至

吾下榻談焉

猶十字  
古拙可笑

与十方院 号松雪軒

来康殊更清持鯉十領之亦為之至也美服期劣略

惺惺野

与方園

都句墩  
掛都句

自播列都句一轉脩程之惠觀費丁力厚情有餘矣

八假冬  
テ

在り何之口為諸會次語之不憲

ツカノ本  
人

熟田主

掲牘款海翁三字蓋遍以金剛古師  
之為銘也

五色之其地中眼之蓬萊閣下鏡仙娥臨破唐乾  
界均于海藏門子双隣波

文祿丙申和馬耳田臺韵

藉是京師古為字新年景象競豪奢自介去  
服玄考志六七人童如之花

和梅菴也詩并序

文己之玄步隨賓門步後卿遊肥之前則名謚也  
海城樓菴為亦侍相國公之幕府常公之之服  
一日振牙采話未盡壁診之意漸昏灯雨一床將



曙之頃一小窗翩然入夢偶撲灯火爲拈點紙一  
詩示之語句曰書窓話十年兩嘆見夏出來撲灯  
予不覺手舞足蹈問曰翁詩何以古人杜老之注目  
寒江倚山閣蘄氏之嘆看飢甌上灯檠黃氏之出門一  
嘆大江橫比之翁之句以模脫出奪胎與換骨乎抑  
以暗合乎

見付紺屋孫左市隱

把茅菴自小。豐草徑終三。塵外千金帚。世緣半甕

十六歲時贈友人 三句送意多

江渚雁秋晚  
子細題為寄聲

○菴墩 富公別室也

萬年同  
好

松永貞徳

咽心拜上

洵

[illegible]







[illegible]

あゝなるびはつちなはるち  
世ゝゝあれゝゝあゝゝあゝゝあゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夢をよめ  
 夢のふいふ  
 夢のふいふ  
 夢のふいふ

承應之甲午歲仲春吉日

二條通鶴屋所田原仁江為厨持行

右 菅玄同の軒を以て之を以て  
考列 菅泉字



竹の二と物

一 鐵力木出廣東色紫黑性堅硬而沉水木荒人多以作屋椽 松古要端 此 されタガヤサシるる一鐵力木

一 後漢杜篤傳論都賦撫未央 註撫巡也或云撫亦模其字從木 唐人の画帖に撫宋人筆とあり 正月

一 定光佛生日 正月初旬 釋迦文佛生日 四月初八日 阿彌陀

佛二月十七日 觀音菩薩生日 二月十九日 地藏菩薩生日 七月三十日 乃蓮花國以上要道人釋門疏云云

二月十九日 觀音菩薩生日 二月十七日 地藏菩薩生日 七月三十日 乃蓮花國以上要道人釋門疏云云

十王の誕生 丹桂籍よりの中より三月初八日 殿閣羅大王誕生より 海防築要 舟師占驗下ろ 三月初五在壁初七俗云閻王誕と云とあれは俗間より

一 二月廿六日 岸 綽汝祐の書齋より 双幅のたもと 明哲克晦の画より 一 懸庭の下に一人柳の末に ちりり側より 柳の二とさ九ありて生と紙ととのり 音より 圓鏡の臺と摩く 伊と水中より 我あり ちりり王義 一 二 瀑水と云と云と 瀑水一條



とらに旅くたの嵐う、遅れぬの路、  
嵐ふまけひるるうく遠山をく、  
希世の逸人、  
のに似て、曾丹表、  
あやう、積紫、

按佩文益古画譜卷五 黄克晦字孔明、  
家貧、学画、後肆力、  
勤、関、久、鍾、月、成、者、  
能、い、載、ら、る、

又一の在、  
又一の在、



一釋分蒙求 二卷

僧東泊茗之祿年申標額之約

衣亨釋書の中より對偶をとるべし

一 清人に 大素 素文 稼圃 の画 — 梅と蟹の画 —

花中寔冠乙丑春  
法元人筆松山

花甲主逢  
六五  
本卦之  
三  
一

六五

六日

一 戊辰三月十日

諸國の

多傷ニテ云々

花巻へ  
 妻と出御町と多く一平に  
 つく道次と

淨光禪院鐘銘并序

江天妙子  
瑞風山  
祥雲子

武州豐島郡瑞鳳山淨光禪院者遠山氏月溪正

曹洞宗  
吉祥寺

圓所建之精藍也、當永祿甲子年、寺成、請吉祥二

寺前  
石

代大別安充為開山寺。初建于和田藏門之內。後

常子  
淨孝

承國主命移建駿河臺又移建金杉町今建者小

二  
 三

石河也。第於七代國傳。乾達所鑄之洪鐘。至今猶

四  
 一

存奈何。崇父聲不遠。聞益以玄黃。既引升。聲乃

あつて  
うへ  
そ

之妙用、詎能盡述者乎、茲因第十一代現任龍動

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor creases and discoloration, characteristic of old paper. There is no text or other markings on the page.



洪金謂有調鐘者欣遇忍氏國翁宗無為富田氏  
岳林妙采信女啓發菩提仰藉檀波共襄鑄就喜  
垂功竣不落虛空屬越作序而銘之

銘曰

鐘在浮屠 聲聞于外 下徹三途 上窮九界  
曉擊未先 誰是聞者 夕扣已後 聞是誰也  
或希或微 乍疾乍徐 竺之青石 華之赤珠  
勒銘為頌 永簾瑞鳳 克紹淨光 地久天長

喜當  
作嘉

歲閏逢采鼓喜平之臘八日

崇敲

明東臯越杜多撰

武刈江戸住

御鑄物師田中丹波守藤原重正作

心越禪師の法より  
此のいふ解る様現れ其の差あり  
社にいふ様様とよまをさる社のあり  
群衆こころに  
御鑄物師田中丹波守藤原重正作  
此のいふ解る様現れ其の差あり  
社にいふ様様とよまをさる社のあり  
群衆こころに  
御鑄物師田中丹波守藤原重正作

大久保  
七面社  
二木あり



梅の影り 門々 中々此西行の傍うゝあや  
か堂に顔あり

享保甲寅秋八月

か堂の程に顔あり  
梅檀窓風 顔柳佇芳於  
湯井

吉祥如意  
山僧寧一筆書

みねの富士あたりにて神明の原より 左米多の  
よりあるあめの傍とて  
東北をる米 東西ナラ余 左のうゝそむ

甘露醴泉に洋洋洒洒于  
以渠

て十あまのう花房のものをうゝがうゝ十七八年をよに  
にノ第一のちあめくしこれわゝ 編纂するもろ  
人もねー 左指のうゝうゝ 動坂とてろ 西米田細  
おぐ牡丹花の圃とてろ 左花のうゝうゝ 四月下旬めく  
ふみめ義坂とのうゝ 平塚め神のおうゝふえ坂とてろ  
船ののれとてろ 左に二あれあまめあゝ  
左に枝折とてろ 左ねねー 左のうゝ左岸めあゝ 二が  
左のうゝ左のうゝのうゝめくー 左のうゝめく  
左のうゝめくー 左のうゝめくー 左のうゝめく  
左のうゝめくー 左のうゝめくー 左のうゝめく

十千亭  
石屋  
義七  
任留  
町







おん  
山金井  
元自  
号遠橋  
之人  
己巳四月  
十七日

とらふあつたし 御免のり付く

信濃 中世 二条寺 ありきりや 石橋

八町 萩屋のいり 五ノ井 ぶくや横町

石橋より 五ノ寺 四軒寺 あり 関あり

千川と水あけのり ありきり 二十町 ありきり

とらふあつたし 御免のり付く

一 府中 移り 少川 天を森八町 あり 己巳 丑年

古碑あり 又ぬえ保し ありきり 己巳 丑年 二月

子古碑あり ありきり

一 寺 村 ありきり ありきり

詠二首 和歌

西へ 往 為 室

江 夢

とらふあつたし 御免のり付く

にきりきり ありきり

とらふあつたし 御免のり付く

又 夢

とらふあつたし 御免のり付く

とらふあつたし 御免のり付く

とらふあつたし 御免のり付く











文草の中は重竹家傳の歌多し碑記ありて  
中々白色石甲年山何ふく足名幸必嘉山寺之  
斯山之矣とあり青月院記

一戊辰五月廿七日午時末氏より所託の古名画と  
ありて  
谷文晁 文晁 飯田氏より何く  
人より中烟と服の一二とより何く何く何く  
あり

その内親王源氏書 二葉 一巻 此は美奥也あり  
依人院宸筆 和分より 奥古後花園院 一巻

○照光院御紙 定文四年十月廿二トアリ 一巻

○柳下繫馬図 芸璉写 四近 三軸

柳下に藩公英アリ 馬ノ額下ニ鹿ノ皮ツキ足ニツグ  
アリ

○雞 二軸 トカゲヲ 三軸 鳥類ナシ 必唐二千年四月日  
芝草 足ヲ踏ム 文近画ト云 柳下石系通極れアリ

○鶴ノ墨繪 相対し 三軸 鶴ノ仰キ先形墨色  
水ニ映アリ あり

○山水横幅 董其昌 文房 清既

只有一幅あり  
上志村殿より  
吹来雪あり  
高文見あり  
三呼 其乃 白字 笑ノ字あり同よりアリニモ  
ナカシ



岸江ノ  
古洞ノ  
因ッ  
ウツ  
名之  
文鼎云  
各ル  
モ之  
リ

○南京八景

海北友雪多因

一巻

○柳燕 元信

詩翁ハ松中洞之屋永基賢

大槓幅 揮画 印 法眼ト

○富士雪画 大槓幅

揮画 法眼ト 年 七十一歳

法眼印

○三幅

左月ノ山水 至馬  
中東坡 行 揮画 多々

之軸

○大ニ幅

右竹鬼ニ  
中 核 擬 三  
右竹鬼ニ 左月ノ同ナリ月ハナ

貴信系

子亭電

之軸

○大修学成同

横幅

揮画 法眼筆

遠山 為 想

多々  
多々  
多々

画中、想スナニ  
遠山トナリ

○雪江波

大槓幅

揮画 多々 寺信

○小幅 圆形 形 表 表

唐義人 景 所 宋 元

唐 元ツヨリタリ 是 別 者  
云モノハト 文鼎云

元ノ黄后 案也

○修学成 八景

五山 修 行

多々  
多々  
多々

一巻

○源氏

花京 朗 酒

多々 并 雅多 中 一巻

○八代集 秀 逸

榮 雅 系 一 巻

雅多ノ奥也







○<sup>日</sup>鶴二条一竹岡 大立軸 羽衣図

○源氏一巻

巻二二日 若 漢一位 高永基之

○序 横幅 雲母糸トアリ 歌也。 雲 山水墨画 横幅 雲母糸

○庭騎図 六曲小屏風 雲母糸

長きうしれりねと又なを部 ぬきしけに  
雲のいふなり 雲母糸トアリ 送客せんとも  
了あ 云ねと云あり 五月海時雲母 雲母糸  
赤山作海の時下り

○神田市水地白く牛以て云と之はあり ぬきしけに  
と云あり 雲母糸トアリ

大付馬所 沙鉄 吾心ハ 雲母糸

あけ馬所 吾心 雲母糸  
雲母糸 雲母糸

年々 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸

正徳五年 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸

雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸

雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸 雲母糸

○定家卿の百首の事



















谷卿集二卷

明神也

○十卷

好方、著書の空華集

一 四庫全書總目別集

對山集

明康

とあり又別集

新存目、對山集十九卷

明康とあり

一 陶淵明の菊

○五言の行

梅園菊の蓮、人、好、とあり

陳白沙、ハ、本、庫、花、とあり

其詩集とありとあり

一 由庫全書總目、隨園詩集十卷

○清遠連實撰

袁枚、隨園詩話、ハ、別、とあり

一 門書、梅花石錄一卷

清季

又梅花百詠

元馮子振と

とあり

一 文化、四庫全書、正、月、九、日、著、十、日、曉、春、門、院、法、中

惟、信、没、行、年、五、十、六、年、華、池、上、中、門、寺、南、院

息、伊、川、法、眼、居、三、十、四、年

行、地、氏、子、の、名、と、あり、とあり

一 光琳画巻跋

右、畫、中、者、同、苗、長、江、軒、青、光、琳、模、倣、也、字、達

真、筆、今、臨、畫、度、不、可、偽、疑、臨、者、や、不、後、從、

記、とあり、親、以、了、匡、比、林、立、德、丈、之、年

久、之、戊、午、秋、乃、り、を、偽、か、一、の、筆、中、光、琳、方、曜、省、統

光、琳、の、對、山、ヨリ、傳、り、の、字、傳、所、傳、所、傳、所、傳、所、傳、



修之班兮，卷束書兮，不繼。

白井宗瑞醫師  
光琳才子之德

日

一 柳 藤 楊 柳 の 池

はるかの 花はる半はる  
時

台徳院極の所とてありて一松の樹國  
徳と都と山村の志は強ふと竹魚を  
芝の庭にもありて雲の庭に松の山の  
紫の山と山の山とてありて松の山の  
山とてありて山の山の山の山の山の







同列走水

觀音像

觀音山山山山山山山

同列下田

決定像

房列

同列下田

甲子年正月

上德寺

百首

同列下田

一 列向古列女付周室三母之大如若武王之母

高后之卒成武王周公之德君子謂左如

仁明而有德之君子也

其中心之有善十子之中惟武王周公

成聖要其安民以播烈光制禮以齊建康

而宣之則德自然著矣若管蔡豎般而

畔乃人才所異不同有不可以少加重任者易曰

力小而任重鮮不及矣反思其受教之時未必

至於斯也豈可以累太如耶

昔年此書



上巻の作者の言に窮せざるに  
 嘉慶元年丙辰板の初刻古刻女信より此  
 數十句を刪くを其の政績と考ふに以て  
 異同を訂せし元和の願唐所の撰より養本  
 ありと云ふ所を  
 戊辰七月五日迄存年記

一 女人身遭者所纏歎嘆心并餘煩惱重於男  
 子又此身中一百五畏怖之苦慈悲同深是故女  
 人煩惱偏重應當善思觀空此身便乃不淨之  
 器臭穢充滿亦如枯井空城破村難可愛樂是故

應生賦離 佛說轉女身經

一 戊辰  
 八月廿五日 夫人保壽所專福者何物思之  
 ちりてお用れ方と申すに福善積存の故あり  
 有りて又の形をてし水鏡を映しつものなきの  
 けりしに傍の在に寂快とてし二字並に之を  
 年号もあらずなりしは後徳和より中野七名の撰  
 重とて定仙年といふ南條山人 川名抄ゆゑ  
 差とて之に二十餘年とてしれを其のしるす所  
 かしきなりしに以て水とてしつるに於て



村東とあひくふて一人とつてゐる事柄の男  
婦の事一々世傳のつゝ書と書せしめて  
海川邊にゐる軍持の事とあるとあるの  
諸事等といふの事とあるといふと  
清の公、享保の年、のつてゐる事と  
いふ事とあるといふ事柄の事とある  
事とあるといふ事とあるといふ事  
位持日沼の事とあるといふ事とある  
事とあるといふ事とあるといふ事とある

死とあるといふ事とあるといふ事  
あるといふ事とあるといふ事とある  
金持様所より中々の事とあるといふ事  
新井梅屋の事とあるといふ事とある  
新井梅屋の事とあるといふ事とある  
こととあるといふ事とあるといふ事  
事とあるといふ事とあるといふ事  
事とあるといふ事とあるといふ事  
事とあるといふ事とあるといふ事  
事とあるといふ事とあるといふ事



馬場下は街道はわが中野より寺所と云ふ  
 信東松あり是よりあつたに梅は所へ  
 松ありありあり松あり松あり松あり  
 漢水ありありあり梅あり梅あり梅あり  
 松あり松あり松あり松あり松あり  
 生あり又養育薬師もふより  
 不表あり

相高山梅照疏 若天正十四年行春阿闍梨  
 州創之安弘法大師手刻藥師佛一夢  
 告阿闍梨以小兒陳病之時藥都鄒信販  
 无不有驗矣先師運樹延享元年甲子從別  
 之崎玉郡袋村西福寺移住之后醫王灵  
 驗培於異日云云下男



又由山川等代就了の模倣とありし  
るを記す 文長クハ不筆

安永ハ已亥春

明王山

法印 祐衆 敦記

妙陽山

法印 英信 達

又馬場下街道を東へ海にゆく

一々房舎村山所標を以てし 又馬場

中一室ありて酒のよるべし 八月廿五日

新市記

一日本国日子来作

入唐通顯 和銅三年帰朝其時寸子持来

日本国寺始 本元寺

僧始 慧使

尼始 法明

右初例抄入之タリ 群合數從四百廿五 釋高部

一山和尚錦の巻 清の孫退谷 庚子銷夏記

蓋錦中五色銀錠紋名山和書也とあり 九月廿日

一茶價ノ一日本各記

顯宗天皇二年冬十月戊午朔癸亥宴群臣是時

長清と  
山和尚と  
唐と  
あり



天下安平民多徭役歲比登稔百姓殷富稱一斛  
銀錢一文トアリ 亦續日本紀、

元明天皇和銅四年錢一文、年穀五升トアリ 亦二  
代實錄、

清和天皇貞觀八年二月大政官如方定左右京  
白米一升直錢四十文前廿六文今加十四文黑米  
三十文前十八文今加十二文是歲穀價騰踊東  
西津頭白米一斛七貫二百文黑米四貫百文由  
是增定京邑沽價トアリ 亦百鍊抄、

後堀河天皇寛喜二年六月二十四日甲申定米價  
斛錢一貫文ト亦太平記、元亨元年夏大旱此年  
錢二百文ヲ以テ粟一斗ヲ買トアリ 亦實錄應仁  
記弘治三年五月廿三日ヨリ八月九日一テ天下大  
旱懸今年金一兩ヲ以テ米五斗ヲ交易ス前  
代未聞ノ一ト記セリ 亦秋坐間詰、室所殿日記  
ヲ引ケル文アリ云ク御房<sup>ミヨウ</sup>名<sup>ナ</sup>半<sup>ハ</sup>下<sup>シタ</sup>衆切米<sup>シタ</sup>拾二石  
賣拂可申由被<sup>レ</sup>仰越候此以兵庫ノ賣買壹石  
六匁二分五厘之由スイタヤ新左衛門申候御召



可有之候ト文ニテ是ハ天文九年ノナリ亦  
續草序雜談ノ見レバ古田兵部ノホソ賣テ後取  
メ番ニ三十文目ニ付一石留也トノ文ニテ是ハ慶長  
四年卯月十日多郎判トアリ亦太平記ノ評ヲ  
見レハ福ノホソ買山門ノ寄附ニ軍餉ニ備フ所  
一千二百餘石ノ黄金百兩ニテ買得ラレタルヲ記  
ヤリ亦唐曆、玄家ノ開元二十八年ノ冬禾一斛  
直ニ錢トアリ亦貞觀政要ノ見レハ太宗ノ貞觀  
二年ノ文ニ逐年陳豐、以三四錢買第一中下

ト見エタリ亦官米ノ出メ氏ノ貧苦ヲ救メラ  
事具價三代實錄、貞觀九年四月辛卯東西  
始置常平所出官米而糴之米一升直新錢八文  
京邑之人來買者如雲是時穀價騰躍内外饑  
饉禾一斛直新錢一千四百由是官糴以救俗  
弊焉トアリ右西讀本長見カ國字忘見、出

一度會延佳神主云延暦年中 葵覽ノ  
内宮儀式帳、不芳ノ御門トアルハテノ鳥居ノ  
事ナリ左右 柱ハ女柱男柱ト云上ノ横亦ハ笠木







是為  
是為  
行休  
可以  
補司  
氏卜  
古集

吾衡者也耶

寬永四年丁卯五月中院

東舟子永喜跋

新正与政人語 惺惺十四年

送招迎正憎友付徵君誰家野出涯放閑  
相話紗窗月下是評梅半是詩 惺惺以香  
与 凡之樂讀

替擊鼓者画像

代禪僧大德寺也南寺  
若惺惺之叙又也鼓者乃

幸五郎  
二郎也

天下新島擊鼓必紅音紫豹画新車當新  
大宅吾家曲維識多夢勝有聲

廣長己亥仲秋贈金番於宗隆園西

之行呂柳中抱之樹也 東海狂波子

別離常易有夢難歸似金馬砂自寬一柱燈中

十里外同心記取奧如景

○惺惺宅二階扁曰授即樓 詩經也

寄人

是為  
是為  
付たに  
此は  
凡は之

花有似教柳綠眉湘花能柳我何知漢又眠  
熟少年而腸斷君玉絕袖時

賣花翁



利走谷每時日塵如坤一箇市中人賣君賣友  
賣夫婦自咲夢花將買花

○附羅浮子作借岷峨集之惠

○山口吉番以豐臣宗永年鉤命主其役作長  
將遠取材于賀丹之二河其長一百八十間其

廣也間柱數二百二十八柱相入地太餘也八月

乃以貨始十二月初以第

山列八幡橋中其移銘  
天正廿年壬辰臘月

○蓮武之江戶城里許也曰淺草有寺亦乃曰

淺草堂閱觀言大士堅坐所境也古呼杖

淺草  
寺  
變

三十二  
字偶  
三十一  
坊寺

屢携家僮紋目信脚遊歷漸入此境則四顧  
闐尔不睦群籜雲漢地淨而肺肝為之炯然  
冬天溜雨杉風橫綠松連枝如疑闕カサカサト金沙  
灘上之婢娟白裙送秀時怪坐神陀落迦之老  
人老屋蕭條三十二字隱映竹林蓬蒿之間而  
檐半傾垣漸頽突兀其間者大士之宮也左  
畔右畔層壇為窟屹立者鬱然若大小若干皆  
其附庸也時野僧三二枚于茅索徇以補苴祠  
堂之罅漏予就渠讀口碑曰寺之掃草邇推



按今之  
專堂  
仿  
催教  
所也  
今不  
有常  
言仍

之則遠在推古天皇統御之日嘗此演有漢者  
曰漢成曰竹成二酒一時下網捕魚網裡稍動  
而如有物舉之則數寸之觀音像也拜以奉  
祠焉是豈不可緣數遂成一方勝區姑寺僧學  
法相慈覺師寓于此改而成天台今常寺事者  
專堂催教是彼二酒之裔也來田租如斯不愈  
問愈不答劍首之一快而去矣雖意根如蓮本  
之不可拔不奈予戲呼童子綸曰按教裏得之  
者又宗而更細中得之者漢成也若有誠信則

無刹不現身余輩欲之童子侍傍微哂曰應身  
今安在哉衆人之不誠信矣大士之不靈驗乎予  
指白櫻樹吟曰意足不求顏色似前身相馬九方臯  
白衣仙人來也吾無愧尔童子低頭不答予而一笑  
昔年造寺以漢成引聖海中曾度生又為得  
人一身現白衣仙子白花櫻

- 京極戶部為分十二世後人北肉山人
- 大匠局法眼講家恂意其書字也
- 惺齋歎夫以肅府于城中草藥堂

按所藥字  
乃為藥



○昨木山人禁持

○戊申歲有下手弑所生之母於下京者人以為常

而不言學諸麻木疾痺人之不知痛痒也世道  
臻此風俗極矣此惡夫也

○舟中規約 代貞頃。按貞頃。主人運商船于安  
東。日。傷。每。行。約。

日本國慶長 年月日 回易大使司貞子元誌

寄林三郎 甲辰閏八月廿六日

前回不虞之勞 會同 明快不可言假言於此時此言一  
以達吾所諾之深衣一領道服一領備製法深衣

者之難服之樣蓋取一時之便也乃院皇明之  
制則短其袖其甚裳可也復所借之知新日錄 大  
編。西。部。二。冊。 還細馬着其附后信紙電囑者急与然

掌而及所取也

○東海瑠華借來頗覺自亦幸 寄林三郎

○尚文遺書 寄林三郎 同上

○異端辨正三冊四統文宗二冊右達天命圖一卷  
未見之書也 同上

○是明人之所以著声承集 同上



上男 ○所告之朝鮮講和使一儒一僧为正为副以僧  
者胡元世祖以寧一山誘導我者也盖以我所  
如遭仇鬼弄者古今然矣不知又我墮于術中  
中奈何之然天下者有天下之人非教焉者  
之所議思之之如話者心也如話者心也  
霜并討明日再拜 同上 乙巳正月十日  
○固知記裁策運焉 同上  
○讀書錄 ○讀書錄三冊 ○敦軒劉紀金冊還東  
好 延平先生錄金二冊附焉此者 ○四合程墨  
書中

書名抄  
字之妙  
可以知  
以各  
之難  
之

李于謙文選 三策一觀之活還之而已 ○割  
金全居二冊心法二冊二編大較一居也 同上  
○左逸終精鑒於定一篇之品評吾邦又不為  
無一風流文已就道學豈不然矣况道外無文  
又分無道是下之志已如此彼風流者不足多焉  
之同上 ○說苑二冊 ○公羊正義在城氏和泉  
子穀梁者在長嘯城尔今奉侍幕府于伏見  
同上 ○宋搢芳四冊還了 ○鳳陽集謁問之日齋  
持吉而已 同上



要言  
漢唐  
訓詁

此  
人  
之  
名  
羅浮

○少正編二冊附錄中同○乃自和歌十二冊還  
為春秋大全十二冊借與通分雅候前春秋  
之傳已散于釋文皆精一受用如何古人讀書  
新於羅浮者者是不在羅浮而在足下明  
窓淨几之上故古人所存之意則謂必有所  
深而己一笑是下讀書秋日用以所存  
意者則告我哉我矣曰此樂事不宣草狀上同  
○勸善各二冊一覽之者還之○歷鑑之  
字為粗貼片紙見此字解則漢唐註刻之字

今之  
所  
朱子  
學者  
棄而  
不講  
何也

亦不可不一涉獵者其富物名數典刑雖曰  
程朱係焉而子以者夥矣繙焉而子注者  
數矣所謂十三經疏者魚而所也耶  
梅洞入晉名附錄同上○仙老遺廣泉  
納了為人須知一第未見之合也同上○鄉  
○善風之同上○今日聽葡萄亭職系之講同上  
○陽明待一冊丘濬詩一冊習尚之項明之原  
在傳之要書室先是借以督尔过了同上○小夜



少話速為午同 ○ 大學衍義并補遺學者  
 所可講讀之居也同 ○ 踏皮一雙聊從建中  
 善為者也 ○ 中臣校解一冊神風記三冊返  
 此等皆各無暇之所作也子足觀之同 ○ 保家  
 全合四策為手裡日上 ○ 漂海錄全二冊備  
 坊觀同上 ○ 洞院實惠所著名月鈔者景  
 所有三万軸之牙籤者皆同上 ○ 禁秘鈔  
 拙卑以一通借書同上 ○ 曲經全錄之外集  
 二冊附為後同上 ○ 書史大小二冊達几前同上

○ 前次所為以古文珠錄十一冊同 ○ 明律今  
 卷八冊同上 ○ 文錦四冊杜集五冊三四日為掃  
 過以還同上 ○ 史冊四十五卷足下以達下城  
 泉利史同上 ○ 學部通辨中同上 ○ 鍾九子  
 蹟太史廣記抄各另搜索同上 ○ 青田全集  
 二冊還為之唐荆川集讀之或文思人為之  
 何同上 ○ 龜山集所既寫了之新冊為之  
 同上 ○ 源觀叢各一帙十冊并墨山文章範範六  
 冊還為之同 ○ 金身所借 直溪鏡同上



○人生待足何時足、未老以閑方是閑、想古人

重老自悔之作歟。以否則不如此言。是下急此。

意亦從海在邇也  
金所待在此  
若芳三清

見付一語惟幸

時上

時道者在駁府慢客亭舍今此

其田各ハアリ

○  
スリ

誠意之郁離子全之策

借以又借

同上

○ 諸儒家集

ח  
ע

○  
吳興春秋

二冊

上

○朱夫子遺稿二十二冊  
○同上

風雅堂

考全十冊附小箋

同上。

○史鈔二冊備考

卷之四

策彙

所觀事也彼誰是哉從

又一代偉人也集所甚愛之也

上

○ 福至之

辨在衛生寶鑑

同上

○皇明通紀

者僅一日速還之上同

○ 國 名 記

13

○ 4 輕 2

才

暇

德  
寫  
口  
上

○日本紀可有倭傳云

上  
下

○

寸書全  
七文

月十日俄中風右半身不遂至今日竟

為靡人者也。實一箇覘肉可憐生所無餘喘中。

一箇結毫思毫聖子淺清淨入無何日

每為年且又歲紀刻蓋棺士林之嘉嘆

之私可謂可惜  
子哀子挽子以  
一辱以是



夕類  
卷

可推中嘉祥己巳日上○澄此金四策還之上

○頃聞足下講通鑑綱目日上○二篇神結芳

報殺者之手同上○夕類卷之字奇、揭之以

為号也太奇同上○多識四冊先付定其前

日話次及古文苑、吾亦子曾搜索則假電腦

同上○四角編入手裏已未九月  
以上字  
甚多

○文則周覽通光懷即今十二冊還納之蓋此

編者皇明文士之製文而別無作文之式故早還

返呈之又子○明通紀全部十七冊還納焉

○孤樹裏諸前年送涉樣同上○四角通鑑

一策了菴錄二冊勿、修卷同上○亭主

強一郡毫三郎衛作一首按係一郡者永壽也  
毫三郎者之古也  
同上

○中正子革解治曆二篇下高子以代予之勞

所底有在美多謝之此冊之至知此冊之珍字則

足之習也耶凡物之顯晦必有數存焉象之所

謂澤火而中正之所謂穢濁之文明也哉必有不

信於俗而以革者此冊之主之所期在新亦吾

乎渠夫知易者然知日易而亦常不易者

全文

中正子

藏子

係木一

合數從

中



歎否乎新茲予而長噓一声又太息而噓一声  
而卷而還焉中正之時与龜子不克無感中  
正子者建仁寺妙壽菴之僧圓月  
字中岩着各号中正子○答正意

○蓬窓八冊早之將來 与言同

○八樣價銀即今四十二錢附此竟 同上

○本草綱目全六快揚文清全三冊還了多事文

類聚可求之而已 同上

金文

○耶孺之禁台命一通誰人之製文否未及一見  
之故相留于几格餘蘊期對牀之日勿之聞之

同上

○瑯邪編金袂一十二冊易鍾聚正全五冊已前

兩部還納之了 同上 ○就中前回之世說今已

收買焉為足下之所藏之善本就之雖冠添

減之畧許借吾世耶若然則語林亦附并焉

同上 ○會天帶子 抄戶帶子者名曰 ○一後志

一冊還了也就中註聯珠待格在架上則暫借也

同上 ○南屋一苞惠來 同上 ○小補類全廿四

冊 同上 ○杜待通之價白銀十錢也 同上

百產  
昌是  
烟草



姜將汁

○明賈一官之婿者某賣各二十許部前持手  
嘯館來別無奇觀之者余袖二通來四六雕部  
皇明世說足下就從一覽吾古文珠璣海篇新  
鏡等之外李獻吉一時四大家略之葉詩各太  
全降之文各通且下之好合之用者何如也  
○所借鄒魯指南起部涉概全袂五策所去焉  
同  
○為咸晏之慶高麗之王在姜將汁  
厚意不可言

全文

○倭名類聚抄 錄抄了 宣可寄多誠為一部之

之中

萬曆庚  
宣秋全

以合狀  
奉通

信命  
使於日

本回富  
訪此山

紫野  
之犬

德寺  
以待

東山

惠今又新刊白氏文集卷、每紙上板寄耳  
之尤適老懷何賜加焉以謝焉 5道田

○紫王引說贈萍上人

惺亭初為僧名  
宗華在相國寺

文君

萬曆庚宮陽月之晦 弘治後人山前荷葉  
房千天瑞寺之東寮

○赤松溪公唐通慨然嘯歛夫以四分台鍾及

性理諸台新以四字加訓釋惠日東後學

萬曆己亥二月二日  
朝鮮國刑部外郎著川姜沅敘

連德源序



之征言

惺宮和歌集

中歌のあまのこゝろ

花のいづはなれうゝのあまのこゝろ  
さるゝとて花のいづはなれうゝのあまのこゝろ  
歌

可畏

いづのあまのこゝろ人になれうゝのあまのこゝろ  
かゝるゝとて花のいづはなれうゝのあまのこゝろ  
花のいづはなれうゝのあまのこゝろ  
若歌集

花のいづはなれうゝのあまのこゝろ

悼恋松氏

花のいづはなれうゝのあまのこゝろ  
花のいづはなれうゝのあまのこゝろ

花のいづはなれうゝのあまのこゝろ

花のいづはなれうゝのあまのこゝろ

花のいづはなれうゝのあまのこゝろ

花のいづはなれうゝのあまのこゝろ

花のいづはなれうゝのあまのこゝろ



[illegible]

いふ人をもあはれをうせむとみめ  
けいふ書のりうの各にふくむて  
はやくのこころひふくむて

聖の中へのもうかくはふせにあらうの  
ふの存うし

朝鮮の刑罰が即ち一掃に盡る  
又女強盗等の罪は皆一掃に盡る  
秋の刈り入れの時に一掃に盡る  
冬の雪の時に一掃に盡る  
春の雪の時に一掃に盡る  
夏の花の時に一掃に盡る











いふやうにいふのきこひしうきせのきこひしうきせ  
きこひしうきせのきこひしうきせ

唐のきこひしうきせのきこひしうきせ  
唐のきこひしうきせのきこひしうきせ

唐のきこひしうきせのきこひしうきせ  
唐のきこひしうきせのきこひしうきせ

唐のきこひしうきせのきこひしうきせ  
唐のきこひしうきせのきこひしうきせ

唐のきこひしうきせのきこひしうきせ  
唐のきこひしうきせのきこひしうきせ

唐のきこひしうきせのきこひしうきせ  
唐のきこひしうきせのきこひしうきせ

秋

唐のきこひしうきせのきこひしうきせ  
唐のきこひしうきせのきこひしうきせ











ううて 但い 頼る 方へ 琴を 弾く 子と  
ういー さい 世に あり ても

天正二年 甲戌 乙子 日 付 伊豫 守 政 重 列  
付 伊豫 守 府 内 秘 御 々 々 々 付 乙 子 又 二 年 日  
付 乙 子 又 二 年 日 付 乙 子 又 二 年 日 付 乙 子 又 二 年 日  
付 乙 子 又 二 年 日 付 乙 子 又 二 年 日 付 乙 子 又 二 年 日

右 山 田 族 族 第 曲 大 意 所 々 々

成 仁 乃 乃 乃 乃  
清 泉



